

SYMPOSION

饗宴

No. 6



日本書院

昭和二十二年七月一日 印刷納本
昭和二十二年七月八日 發行

饗宴

第六號

定價十五圓

柿村重松著
山岸徳平校

上代日本漢文學史

故柿村重松教授は本朝文粹註譯を完成して、學士院賞恩賜賞を得られた後、引續き日本漢文學史の大著に着手、上代より近世に及ぶ計畫の下に筆を進められたが、その稿平安末期に至つて、不幸宿病のため長逝された。併し乍ら故教授の高邁な見識、深遠精緻な學殖は、この中に遺憾なく發揮され、日本文學研究上未開の分野に燦然たる光明をおくつた。

校訂者は、まづ上代の部の遺稿を整理して、成るに従つてこれを「上代日本漢文學史」として組版に付した。收むるところ、文書の傳來に始まり奈良末期に及ぶ上代の全期で、續刊さるべき中古日本漢文學史に先驅する。索引、著者、年譜、圖版を附す。

(定價五十八圓・送料五圓)

鳥津久基校註

校訂 源氏物語 (桐壺・帚木・空蟬・夕顔)

世界文學の系譜の上に輝く日本文學の至寶源氏物語は、文化國日本の礎石の一つでもある。シエクスピアに英國人が抱く親近感ほどのものを、源氏物語に對してわれわれ日本人が持つてゐなかつたとしたら、文化國民として落第であらう。校訂源氏は、學徒は勿論、青年會、讀書會等のテキストとして手頃に編輯され、校訂され、附註されてゐる。

(定價二十圓・送料一圓二十錢)

森 莊己池校註

宮澤賢治歌集

宮澤賢治は詩人たるに先んじてまづ歌人であつた。八百二十に餘る作品は、早くも彼の中學高農を通過しての學生時代にもされたものであつたが、賢治文學の光芒は識者の目を射る。故人の親友森氏の懇切な解説と註を附す。

(定價四十五圓・送料五圓)

式『みだれ髪』の作者において完全に統一されてゐた。言葉を換へれば、明治卅年代初頭の時代の感情と好尚とを『みだれ髪』の作者は、最も整つた形に、最も濃厚に、最も豊潤に代辯した。作者に、この歌集の中心の價值を置かうとするのである。私はここに最後に、『みだれ髪』の第四の特色として、その構想の奇峭、措辭の斬新等を擧げ得る。

夜の帳にさゝめき盡きし星の今を下界の人の鬢のほつれよ
これは『みだれ髪』巻頭の歌であり、そして晦澁難解を以て、其當時、一部の人々から烈しく非難されたもの、歌の意は與謝野鐵幹の解説を借りると「天上の夜の帳の歡語が、蜜の如くあまく、圓滿であつたに引替へて、下界に降された星の子の我は、今を戀の得がたさに瘦せて、色なき鬢の如何に亂れ多きかを見給へ」廿四年十月「明星」所載「鐵幹歌語」といふのである。天上の戀と地上の戀とを對比した點で、この佳什も亦、ロッセティの『昇天聖女』を聯想させ、一首の構想がすでに奇逸な上に、「さゝめき盡きし」などいふ破格的な措辭が、却つて斬新な味ひを齎らしてゐる。又、歌にきけよ誰れ野の花に紅き舌むおもむきあるか上春罪もつ子罪もつ子で、戀に惱める心持を象徴的に云ひ現してゐる上に、「春な言葉つかひである。上田敏がこの第三句を「西文の姿あり」と評したのは肯綮に中る。『みだれ髪』一篇には又、斬新なそして暗示的

な造語、例へば「そぞろ髪」と「とき紅」おごりの春「はたち妻」など枚擧に遑なく、これらの造語は夫々の光景に應じ、情趣に適つて、いかにも生々と活躍してゐる。ユウゴオは「言葉は生物である」と云つたが、『みだれ髪』の造語は、正にこれを立證してゐる。惟ふに『みだれ髪』ほど、和歌における「言語」の位相についての問題を提供するものは少ないのであらう。例へば、この集の巻頭「夜の帳に」の歌のやうな複雑な情緒を、果して三十一文字の和歌の形式に表現し得るか否か。もし得るとすれば、從來の言葉、或は措辭において、敢てし得るか否か。少くもそれを一層効果あるものたるためには、言語そのものの持つ「指示性」と言語そのものの持つ「暗示性」との何れに重點が置かるべきか。——かういふかすの問題が『みだれ髪』を中心として當然起り得る。——かうしそれら問題の解決に當つてあらかじめ記憶さるべきことの一つは『みだれ髪』一篇が其結果から見ても修辭學の舊き束縛を脱しようとした一つの試みであり得たことである。アーサー・シモンズは、その著「文學上の象徴派運動」に、話と言語との關係を論じた一節で「言語が、より微妙な翼によつて高く翔翔するためには、話の慣例的な括弧が毀される」と云つてゐる。『みだれ髪』の一篇は、確かにそれを如實に顯證した一つの例である。其調の奇峭の故に『みだれ髪』を難することは上田敏の云つてゐるやうに、確に「文藝の友」ではないのである。

大和國原

田中克己

こゝからは法隆寺も藥師寺も遠くて
朝晩のゆきかへりの汽車は稻田の中を駆けるだけだ
實りは悪いといふが國原は一面に眞黄色に染つて
畝傍耳梨香久山が島のやうに浮いて見える
遠くにゐたとき念じてゐた鍬をとることもなく
本をよみペンを把るだけの仕事にかへり
素人眼の豊作に安心してゐる詩人を
みづから時には叱りながらもその非難は微温的で
赤門を毎日くゞり銀杏の並木——もう黄葉し落葉したことと思ふが——の下を
胸そらせて歩き事ごとくに人を咎めた日を忘れてゐる
我れ老いたり矣

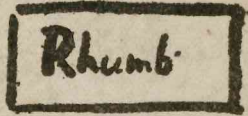
のケント南端沖に於けるオランダ軍大敗の報は英國に對する完全な屈服の鐘の音であつた。貿易はそれまでの三分の一以下となり、過ぎし日、世界の繁榮を獨占したアムステルダム町の町々は雜草の茂るにまかせ、三千軒からの空家が生ずるに至つた。國內の至るところには饑餓と失望が充滿し、人々の若々しかつた目は老衰し、希望の光は曉の星の如く消えていつた。

斯くして彼等の生活から夢が失はれたのである。然し流石に半世紀に涉つて築き上げた廣大な植民地と投資によつて、又その經驗によつて破滅は脱がれ、幾分の平靜はとりもどしたと言へ、その後等の努力は總て守勢のための奮みであつた。かつて能動的であつた彼等の活動は専ら受動的になつた。潑刺さと創意は失はれ、如何にして新たなる外國の力に追従して、自己の地位をそれ以上くづさず保つかに情性的な努力がさざげられた。

この様な傾向と風潮は生活様式の上にも文化の上にも十分うかがはれるであらう。フランスの流行やフランスの書風は、既にルイ十四世の侵入以前から、この快樂と安逸に貴族化した國に流入し始めてゐたが、その後はいよいよこの風潮に流され、とにかくも上流社會に地位を保ち得た嘗ての小ざつぱりした商人ブルジョア市民はフランス風の貴族の流行を汲々として取り入れるやうになつた。オランダの流行のまに／＼書風と畫題をかへてきた、それ故にまた最後までみじめな生活を送らずに済んだ風俗畫家ビータ・ドウ・ホーの晩年の作品をみれば、そこには嘗ての瑞々しいオランダ風は殆ど見出し得ない——そして彼が十七世紀オランダ繪畫の最後の人でもあつた。この様な時代に、次第に深まりゆくレムブラントの藝術が彼等の理解からかけ離れるのは寧ろ當然であつたかも知れぬ。私は前にオランダ文化の根柢の淺さを述べた。しかし淺いなり、潑刺としてゐた時代、即ち生活に夢をもつてゐた上昇期には獨自の

好ましい發展をとげた。オランダの風俗畫が最も健全に生育し且つ最もすぐれた畫家を出したのは一六三〇年代である。私は文化の發展衰微が必ずしも國家とか民族の所謂勢力の展開にのみ隨伴するとは言はない。然し文化の根柢が淺薄であればあるほど、軍事的政治的勢力の失墜にとかく流され易いことは、少くとも言へるであらう。オランダ文化の悲劇も亦ここにあり。更に極言すれば、レムブラントを理解し得なかつたところにオランダの悲劇があるのではないだらうか？。ボーデも言ふ如く、彼ほど徹底的にオランダ人であつた畫家は他に見當らない。風景畫、肖像畫は言ふまでもなく、聖書に取材した作品も、總てにオランダの生活に結びついてゐる——彼の描く宗教畫は直接オランダの生活に結びついてゐる。彼は聖書をオランダの中に、オランダ人の中に生命を通して理解した。彼に於ては聖書の記述がそのまま、自己の生活感情と融合したものである。然るに、この様なレムブラントを當時のオランダ人は竟に理解し得なかつた……いや、彼の死後、彼を再認識し得たのも、先づオランダ以外の國の人々であつた。

ここまで書いてきて、私の念頭に敗戦後よく言はれる文化國家といふ言葉がふと浮ひ上つた。敗戦國民たる吾々の生きる道として言はれる此の言葉の、時にあまりにも安易にして不用意すぎはしないかと、私は疑懼の念を抱くのである。夢のない民族、心豊かな夢を抱き得ぬ精神から、恐らく生き／＼とした文化は生れないだらうと思ふ。敗戦國とか國際政治の面に徴力化した民族は、とかくこの夢を失ひがちである——といふより、失ひ易い條件を多くもつてゐる……さうした時にこそ一層失つてはならぬ夢にも拘らず……。



○周知のやうに昨年の下半期以來、用紙問題が未曾有の難局に乗上げ、出版界は全面的な停滯を餘儀なくされた。そして跳梁するものは「文化」の名を冠するに値せぬ營利出版のみであつた。しかもヤミ達者な出版業者さへも、月刊雜誌には日限の制限があるため一層の困難が伴ひ、休刊や合併號の續出をみる有様となつた。「饗宴」も同じ問題に苦しみ抜いたが、殊にアカデミズムと評される——實は「饗宴」が通俗誌と看做されるところまで日本の文化水準の高まることが同人の悲願なのだが

——非營利的性格は、無邊際の上昇するヤミ紙の使用を許さぬため、むしろ一段の苦汁を喫せねばならなかつた。○しかし窮すれば通するのである。

らう。前途は必ずしも樂觀を容されぬにしても、内閣による用紙對策が一應驗をみせて、絶えて久しい配給が、僅少年ら復活したのは慶すべきであらう。ヤミ紙を明るみへ出すことと、これに關聯して營利主義的大量出版の部數制限によつて、純粹な立場を保持しようとする非商業的出版にも存続の餘地を與へようとしたもので、我々は政府のすることは頭から信用せぬ習慣を止めて、眞面目に當局の所置を注視し、その成果に期待しようとするものである。勿論これは「饗宴」のためではなく、祖國の文化を愛ふる者の等しき態度であるべきものと思ふ。○「饗宴」も各方面からの力強い支持を享けてこゝまで來た。今後に期するところは、この雜誌がもつ批評的立場を堅持し、文藝歴史等の基盤の上に、自由にもを言つてゆきたいことである。用紙の現實が叙上の通り

で、形の上でも六十四頁の制限下に置かれてゐる今、從來のやうに長大な研究論文の列載は不可能となつたが、文化批評の鋭角的な發揮により、これを補つて餘りあるよさを創造してゆくつもりである。

○この雜誌を生かすものは讀者であり、讀者の良識である。われわれは雜誌が、讀者のともだち——善友であり、益友であるべきことを知つてゐる。益はあつても師父の嚴しさを冷たさがあつてはならない。一緒に勉強することも、一緒にたのよい遊びをすることも出来るともだちでなければならぬと思つてゐる。「饗宴」を良識ある讀者のよいともだちとしてふさはしい雜誌に仕立てあげるのが、編輯者の仕事である。かやうな意味での通俗性を、「饗宴」のものとするために、われわれは骨を折つてゐるのである。(市村)

第六號

定價金十五圓

昭和二十二年七月一日印刷納本
昭和二十二年七月八日發行

編集人 市村 宏
發行人 杉山 榮 一
印刷人 小坂 孟

東京都新宿區市谷加賀町一、二
印刷所 大日本印刷株式會社 (東京)

東京都千代田區神田區神田二一九
配給元 日本配給株式會社

東京都千代田區神田區須田町一、二
發行所 株式會社 日本書院

電話神田(25)七四四番
振替東京四七四四番

☆直接購読案内

小賣店の遠隔その他入手困難な方の便宜を計るため、特に部數を限つて本社宛直接申込みに應じます。半年以上を概算して御送金下さい。